

ネットと登山

昨年の暮れのこと。私たちの会は、冬山合宿を南アルプスの鳳凰三山周辺で実施した。メンバーは六人。アプローチの足には全員が一台に乗れる4WD、スタッドレスのレンタカーを調達した。

「足もとは完璧です。ナビも行き先をばっちり打ちこんどきました」

運転手役はけっこう車や電子機器に詳しい仲間だったので、大船に乗ったつもりで走り出したのだったが、韭崎を抜けて御座石鉱泉に向かう手前で、ナビの画面にゴールのフラッグが立ち、案内を終了してしまった。

くだんの仲間は、

「あれ、おかしいな。もういっぺん入れ直しますから…」と、目的地を打ち込みはじめた。

「ほ・う・お・う……」

「おい、ちょっと待て！ 山の名前打ち込んでどうするんだ？」

爆笑!!。無事、御座石鉱泉に到着したのだけれど、山の名前を打ち込まれたナビもちょっと困ったんじゃないか、と思う。今回は、ネットと登山について触れたい。

私の登山

14

ワタシと登山

どんな山がやりたいんだ？

半田ファミリー山の会代表
洞井 孝雄

活字とプリントアウト

「加藤文太郎という名前を知っているひと？」数人の手が上がる。

「じゃあ、ヒラリーは？」バラバラ。モリス・エルズバーグは？ 田部井淳子は？ ラインホルト・メスナーは？……あー、これじゃあ多分、ウェストンも小島鳥水も知らないわな。

愛知県連の登山学校が始まった。4月から9月までほとんど毎週、理論講座と実技が繰り返される。その初日は終日、入校式も兼ねた理論講座が行われるが、「こんなことは知らなくても山に登れるけど、登山の会員なら知っておいてほしい」ということでカリキュラムの最初に設けられているのが「登山運動の理念」である。登山がどのような状況の中でなぜ生まれたのか、どんな存在である必要があるのかを語るためには、社会的背景と近代登山の歴史を知らなければならぬのだが、最近はそのことを知っているひとが少なくなった。

おそらく、本を（というより、新聞なども含めて、活字を）読まないひとたちが増えてきていることが大きいと思うのだが、仕方がないので、数年前から話の糸口として、自分の本棚の本を適当にみつくるって作った「山の

本のリスト」を最初に渡して読書をするのを促すようにしている。古典、ノンフィクション、紀行、小説ほか、150冊前後。多くは現在でも手に入る本だ。

で、話は、みんなが本を読まない、活字媒体は売れない時代だといわれている、あの山岳雑誌をつぶしたのとはみんなが本を買わなかったせいだ、などという愚痴になるのだが、実は問題にしたいのはそのことではない。

活字を読まない、ということはガイドブックも読まないということだろう。ガイドブックを開いて、地域の概要をつかみ、地図を開いて、目指す山のコースを調べ、高低難易、交通機関、そして日程などを比較検討して計画を立てる、などという手順で山に登ろうとする登山者がどれくらいいるのだろうか。多分、ネットから引張り出した情報を頼りに山に登っているひとたちは多いはずである。

だいたい、パソコンに向かって山名を打ち込めば、「行ってきた」「オレも行った」なんて記事がワンさと検索できてしまう時代である。そこには、登山口から歩いたルート上の特徴的なポイントが写真入りで紹介され、コメントが付されている。

昨今は、インターネットで検索したこれらの山の「記録」をプリントアウトはらはらしながら一歩を踏み出す、周囲の山川草木に思いをはせ、あえぎながら登り切った山頂の眺望や山座同定に心奪われる、そんな登山の楽しみが、単なる写真と現地との照合作業をするだけのポイント通過ゲームにとつかわってきてはいまいか。

地図読みが大切だ、とさまざまなところで取り上げられながら、事故統計の中で最も多い40%以上を道迷い事故が占めているのは、こういう登山の傾向と無関係ではないような気がする。

便利な世の中になったが、ネット頼みの登山は、人間が自然に働きかけて、そこから何かを受け止める、いわば感性の反映として成り立つ登山とは対極にあるような気がするのだが、どうだろうか？

したものをガイドブック代わりに、山に出かけているひとが多くなってきているようだ。

いくつかのサイトを除いて、多くの「行ってきた」サイトには、地形図や概念図がないか、あっても自分たちが歩いた部分だけを切り取って掲出されていて、山域や周囲との位置関係がわからないかわりにくい。

ネット写真の確認作業で山頂に着いてしまう

地形図もまた、ネットから簡単に取り出すことができるようになった。当該の山の部分だけを取り出してプリントアウトすることが可能である。かつ

の2万5千分の1地形図のように、何枚かにまたがったり、山に隣接する市町村を表す図がほとんどを占めていたり、ということもなく、登山口や山が何県のどんな位置にあるのか、ということや、最寄りの都市や駅、周辺にあるものとの位置関係を把握することが難しくなった。どの道を通っていくか、ということも知らなくても、家から車のナビの示すままに走れば、登山口に立ててしまふ。道路地図も不要である。ただし、ナビがあっても街中で道迷い遭難することもないわけではないが、登山口からは、地図なんか見なくても、磁石なんかなくても、プリントアウト

の山行記録にあるポイントごとの写真とコメント通りに進んでいけば事足りる。「おお、ここだこ



一般向けの登山講座でツェルトの張り方を説明する



同登山講座の座学、熱心に講義を受ける受講者たち

「おお、ここだこ」と写真と現地のポイントと照らし合わせ、確認する作業をしているうちに山頂に着いてしまふ。下山もまた、プリントアウトの記述（へ

「安全環」付きカラビナ

最近、ベーシック・ミニマムの装備のひとつとしてカラビナが定着してきたことは嬉しいのだが「安環付きを」と言われると、「また安全環か？」と思ってしまう。悪いことではないが、カラビナがどんなもので、それをどう使うかも十分に説明しないで、はじめから安全環付きのカラビナを持って行け、と言うのは順序が違うだろう、と言いたいのだ。カラビナのゲートが下向きになっていると、岩角などで開いてロープが外れ、事故に繋がる場合があるので、常にゲートを上向きにセットするのが基本で、安全環は、ゲートが開く事故を減らすために考えられた仕掛けだが、カラビナのゲートの向きなどお構いなし、岩登りでも同様に無頓着に使っているくせに「何でもかんでも安全環付き」、そう言いたがるひとが増えてきたような気がする。安全環付きのものはかさばるし、数が増えれば重くなる。習熟していないければ扱いにくいし、手袋をはめたりした場合には一層動作も遅くなる。なんでも安環付き、というのは違うような気がする。ほどほどに。時と場合によるんだ。